

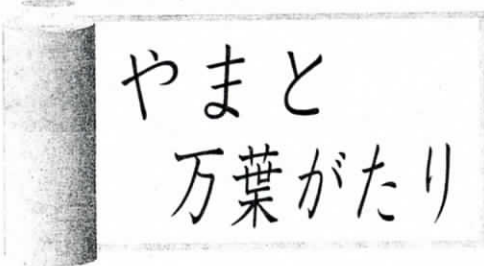
他国に 結婚に行きて

大刀が緒も いまだ解かねば さ夜そ明けにける

作者未詳(巻十二・二九〇六)

歌に「結婚」の二文字が見えますね。『万葉集』の「結婚」に「結婚」と書かれた歌は3例ありま。今回の「結婚に行く」という例のほか、「結婚に来る」という例、そして二人の男性が一人の女性に「結婚する」という例です。どうやら今の「結婚」とは意味が違いそうで

歌に「結婚」の二文字が見えますね。『万葉集』の「結婚」に「結婚」と書かれた歌は3例ありま。今回の「結婚に行く」という例のほか、「結婚に来る」という例、そして二人の男性が一人の女性に「結婚する」という例です。この歌の男性は、わざわざ他の国まで求婚に行き、邪魔な大刀



の紐すら解かないまま、夜が明けてしまっただよ、と嘆いています。女性に思いを受け入れてもらえなかった男性の歌ですが、実は神話の影響があると考えられています。

『古事記』上巻に40句にも及ぶ長い歌があります。八千矛神(大國主神の別名)は「遠

遠し高志の国(北陸)に美しく賢い女性(沼河比売)がいると聞いて、出雲から「さ呼ばひに」出かけます。そして「大刀が緒もいまだ解かず」、大刀の紐も解かず上着も身に着けたまま、乙女の寝ている扉を押し開けて、引いたりして立って、うちに、鳥が鳴く朝になってしまいました。この腹立たしい鳥の歌です。

研究者・阪口由佳

【訳】他郷へ遠く求婚に来て太刀の緒もまだ解かないのに、もう夜は明けてしまったよ。

けて終わります。

『万葉集』で「大刀」は「剣大刀」などの枕詞として用いられることが多く、恋の歌に「大刀」そのものが詠まれることは他にありません。今回の歌は、八千矛神の歌を利用したものといえます。

なるほど、女性の家に入れてもらえなかった時の男性にぴったりな歌ですね。

真珠たまつく 越をちの菅原すがはら

われ刈らず 人の刈らまく 惜をしき菅原

作者未詳(巻七・一三四一)

「惜ら菅原」が「惜ら清し女」を意味しています。菅原の「菅」は「清」と発音が同じで、清らかな女性が想像されたのでしょう。

冒頭の解説の続きで「どっき易やすさが利点

『万葉集』全20巻は巻によって個性があります。巻七はというと「まとまりの悪さの点で類がない」、

「万葉集の吹溜り、皺寄せの先取りと言われかねない」(小学館『新編日本古典文学全集』)と

解説されます。なんとも歯に衣着せぬ印象的な解説ですね。

この巻には雑歌・譬歌・挽歌という三つのジャンルが収められています。今回の歌は譬歌に入っており、

何かに譬えて恋心を詠むものです。そのまま読むと恋の歌には見えませんが、これは、女性を菅原に譬えた、男性の恋の歌です。

「真珠つく」は枕詞

やまと
万葉がたり

で「玉を貫くのは「緒」なので同じ発音をもつ「ヲチ」という地名にかかっています。その越にある菅原(女性)を手に入れたのに、他の男性が手に入れるのが惜しいよ、という切ない歌です。

女性を菅に譬える歌は『万葉集』に複数ありますが、この譬歌の

方法は『古事記』下巻の歌に明らかです。「八田の一本菅は子持たず

「八田の一本菅は子持たず 惜ら菅原 言し清らかな乙女よ」

をこそ 菅原と言はめ 仁徳天皇が八田若郎女と別れる時の歌で、

「八田女と別れる時の歌で、

「八田女と別れる時の歌で、

「八田女と別れる時の歌で、

【訳】真珠をつけるヲチの菅原よ。私が刈らず、他人が刈るだろうことの残念な菅原よ。

とフォローされている巻七。中でも譬歌は真意を想像しながら読むと楽しめるのではないだろうか。(県立万葉文化館主任 研究員・阪口由佳)